むさしのTALK

プランニングプロデューサー
手塚るみ子さん

まちと共に自分も成長してきた吉祥寺はまさに私のホームグラウンドです

漫画の神様・手塚治虫さんの長女として生まれ、手塚イズムを今に伝えるプロデューサーとして活躍する手塚るみ子さん。50年を超えた吉祥寺との関わりと、そこから見えてきたまちの魅力とは。

成蹊小学校に通い始めて以来、私の「吉祥寺歴」も50年になりました。小学校に入学した当時、手塚家は練馬区富士見台にあり、そこから電車とバスを乗り継いで約1時間かけて通学していました。その頃は漫画を描くことが好きで、ノートにきちんとコマ割りをして描いていて、将来は漫画家になりたいとも思っていました。

でも、中学生になると、「手塚治虫の娘」として見られることに反発を覚えるようになり、漫画を描くことはやめて吹奏楽部へ。部活動が終わると部員のみんなと成蹊から吉祥寺駅までおしゃべりしながら歩いたり、井の頭公園の雑木林で楽器の練習をしたり、発表会の前には公園内の弁財天にお参りしたり。まちとの関わりもより深くなって、家にいるより吉祥寺にいる時間の方が長かったと思います。まちと共に成長してきた自分にとって吉祥寺は、まさに私のホームグラウンドです。

吉祥寺で父と2人だけで食事をした思い出もあります。23歳の頃、結婚して家を出ようとした私に母は猛反対。もめていることを知った父が「どこかで2人だけで話そうか」と言ってくれた時、私は自分のホームグラウンドの吉祥寺に父を呼びました。今はもうない駅近くの懐石料理店「菜」を予約して、父と一対一で初めて大人の会話をしたのです。しばらくして父は亡くなったので、これが最初で最後の2人だけの晩餐になってしまいましたが。

吉祥寺で最初に手塚作品のイベントを開催したのは、ギャラリーKAIでの「手塚治虫の美女画展」で、その後、手塚作品のトリビュートマーケットフェス「手塚治虫文化祭～キチムシ」を2015年からリベストギャラリー創（吉祥寺東町）で開催してきました。多彩な作家が出品するコラボグッズが買えるイベントとして好評を博しましたが、2018年にいったん終了。昨年2021年にはアトムデビュー70周年を記念して久しぶりに復活しました。今後も機会があれば、吉祥寺で何か企画してみたいですね。

最近は、にぎやかな吉祥寺の駅前よりも、自分の生活圏である住宅街を歩くのが何よりの楽しみです。昔ながらの古い家がある一方、最近建ったモダンな家もあり、その中にポツンとお店ができていたりして新しい発見もあります。変わらないものと変わっていくものとが共存する住宅街を歩いていると、私と吉祥寺との50年の歳月を体感することができるのです。

手塚るみ子（てづか るみこ） プランニングプロデューサー、手塚プロダクション取締役。1964年、漫画家・手塚治虫の長女として生まれる。成蹊小学校・中学校・高校・大学を卒業後、広告代理店に入社。89年、父の死をきっかけに独立し、手塚作品の企画プロデュースを始める。吉祥寺のギャラリーで『手塚治虫の美女画展』『手塚治虫文化祭～キチムシ』など新機軸の企画展をプロデュースして話題に。著書に『定本オサムシに伝えて』などがある。